農村において食用利用される野生植物と 地域植物相との関係に関する研究

— 栃木県馬頭地区を事例に —

Study on the variety of dietary wild plant and the local flora in a rural landscape

A case study in Batou district, Tochigi.

小島仁志*・佐々木恵子**・伊藤光***・大澤啓志*

Hitoshi KOJIMA*, Keiko SASAKI**, Hikari ITO***, Satoshi OSAWA*

(*日本大学 生物資源科学部 **慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 ***株式会社マインドシェア)

(*College of Bioresource Sciences, Nihon University **Graduate School of Media and Governance, Keio University ***MINDSHARE INC.)

I はじめに

農村計画学において農村の生物多様性を扱う場合、単に生物学的な多様性のみならず、「農村社会と不可分のものとしての生物多様性」という視点¹⁾、すなわち一体的に成立してきた農村社会の知恵や文化と生物多様性との関係も併せて扱うことが不可欠である。そのため生物相に対する認識や、生物資源利用の実態といった、地域の生物多様性と住民の暮らしとの具体的な結びつきについての実証研究が求められる。その際、最も密に住民が利用する住宅敷地には野生植物が導入・利用され易く²⁾³⁾、その農村計画上の位置付けも検討する必要がある。

関連する既往研究としては、住宅敷地内の植栽植物の種構成や配置状況⁴⁾、生業や土地利用の変化と農村における資源利用の関連^{5) 6) 7)}、利用対象生物を扱った民俗学的研究⁸⁾、民家庭園に導入されたレッドリスト植物の現状³⁾等はあるが、背景となる地域の植物相の多様性と生物資源利用との関連を論じたものはほとんどない。

そこで本研究では、その一つの試みとして、地域植物相から生活の中に取り込まれる野生植物^{注1)}の資源利用について調査した。植物資源には多様な利用形態があるが、本研究では摂食という、直接的な資源利用の一つであり、近年では都市農村交流においても地域の活性化を計る上で重要な要素⁹⁾ともなっている食用利用植物(植物個体そのものや葉・果実・茎等を調理または生のまま食す植物)に注目し、その利用実態と地域植物相の多様性との関係について検討することを目的とした。

具体的には、①栽培種を除き食用とされる野生生物資源の利用状況、②地域における野生植物相、さらに③住宅敷地内の植物の分布と利用状況を調査・把握し、種の重複程度を解析した。すなわち、生活における食用利用植物と地域植物相との関係について事例的ではあるが実

態把握を試み、計画論上想定される地域類型の中での課題を整理した。

II 対象地域の概要

調査対象地とした栃木県那珂川町馬頭地区(旧馬頭町、2005年に小川町と合併して那珂川町になる)は、栃木県北東部に位置する。那珂川町の人口は20,000人弱、世帯数は約6,000戸(2008年度)である。内陸性気候とされ、平均年降水量は1,370mm、平均気温は12.9℃^{注2)}である。那珂川町は森林が多くを占める(総面積192.8km²に対し53.3%)^{注3)}中山間地域である。また農林業経営体数^{注4)}は合計1,702であり、これは栃木県内で上位に入る。調査対象地付近は八溝山塊に属する山地地形であり、那珂川支流の武茂川沿いの谷底低地には平坦地が分布する(図1)。これら川沿いの低地部の水田・畑地、山麓斜面の里山林からなる農村景観が卓越する。

調査は、武茂川の中流部に位置する大山田下郷の一農家(S氏宅)に対して実施した。S氏宅は、代々林業で

図1 調査対象地域およびS氏宅周辺状況

Fig.1 Location of survey Area

主たる収入を得ているが、自家用の田畑も耕作している。S氏宅の所有地面積は、合計約24.5ha（住宅敷地・田畑・林地の合計）である。S氏宅を対象とした理由は、S氏宅が馬頭地区における典型的な農村景観に存在している点、現在も農林業を中心とする生活様式を継続し、地域を筆頭する農林地経営^{注5)}を行っている点からである。

S氏宅の住宅敷地（約0.4ha）は、武茂川沿いの耕作田と低地と山麓斜面との間の緩斜面に位置する。住宅敷地の構成は（図2）、まず中央の木造母屋、その西側の木造倉庫、さらに倉庫南側に息子夫婦宅があり、L字型に主要な建造物が配置されている。まとまった自家耕作畑がビニールハウス周辺と母屋北東の倉庫周辺にある他、駐車場、農機具倉庫等が点在する。母屋東側に竹林を有し、住宅敷地を囲う生垣は存在しない。南側にはヨシ・ガマからなる湿地・休耕田があるが日常的な利用は認められない。

一方、S氏宅の住宅敷地の背後の山麓斜面には自己所有の林地（約21.3ha）が広がっている他、耕作棚田が存在する。林地には、不定期に管理・施業されるスギ・ヒ

ノキ植林・竹林、また現在も管理利用されるシイタケ原木用のコナラ林等の二次林から周辺山野が構成されている。このように宅地と所有する田畑・林地が連続しており、狭い範囲に多様な土地利用が存在することが特徴である。

III 調査方法

調査はまず、後藤ら⁶⁾に準拠し、地域の生物資源利用の知識に長けている60歳以上の世帯長者（男性1913年生まれ、女性1910年生まれ）に対しヒアリングを行った。このヒアリング調査では、主に住宅敷地外で周辺山野や近隣河川等からの伝統的な生物資源の食用利用（かつて経験したが現在では利用されないものも含む）を聞いた。ヒアリング項目は、種名、採取場所、採取方法、採取時期、資源利用状況、利用方法とした。次に、植物相調査として、概ねS氏宅の所有する住宅敷地を除く樹林地、棚田、林道・林縁といった前述の周辺山野の範囲

をくまなく踏査し、それぞれについて確認した維管束植物の種を記録した。なお、帰化種は明治以降に帰化した狭義の帰化植物とした。これらの調査は 2008 年 3 月～11 月にかけて計 7 回実施した。最後に S 氏宅住宅敷地における植物調査として、目視により住宅敷地内の植物の種名および分布位置を記録した。これは利用頻度が高いと判断された家屋周辺(図 2 破線内)を対象に行った。

IV 結果および考察

1 生物資源の食用利用状況

ヒアリングにより、計 35 項目の野生生物の食用利用が確認された(表 1)。内訳は、植物資源 15 種、動物資源 17 種、キノコ類 3 種であった。動物では特に魚類が 13 種と多く、近隣河川(那珂川・武茂川)を通じた回遊魚(ウナギ、アユ等)の資源利用が特筆された。しかし、現在も普通に資源利用が行われているのは 4 種のみで、多くはその頻度が低下していた。

植物資源は、生物資源全 35 項目のうち約 44%(15 種)を占めていた。特に山菜類が 9 種(ワラビ、フキ、サンショウ等)と多く(植物資源全 15 項中の 60%)、山菜以

外では、モウソウチク、ヤマユリ等が食用利用されていた。中にはヤマゴボウのように胃腸調整といった薬用効果も兼ねたものも含まれた。動物資源の現在の利用状況の低調さに対し、植物資源は山菜類を中心に現在も高い頻度での利用が維持されていた。そしてほとんどの種が複数の料理として食され、生活の中で多様に利用されていた。

採取時期は、初夏～夏期に集中する魚類とは異なり、4～5 月頃の春季が多かった。これは、春に新芽を出す山菜類が多いことやモウソウチクが含まれることによるが、他の時期でも、夏季のアオジソ、夏季～秋季のヤマグワ、冬季のヤマユリ、冬季～春季のワサビが認められた。一方、キノコ類は梅雨期～秋季に採取されていた。このように植物資源が主に 4～5 月の春季、動物資源が主に 6～8 月の夏季および 12～1 月の冬期に採取されており、生物資源利用全体でみれば、かつては年間を通じて生物資源が利用されていた。

2 周辺山野の野生植物相

S 宅周辺における植物相調査の結果、92 科 404 種(内帰化種 31 種、帰化率 7.7%)が確認された(表 2)。環

表 1 S 氏宅における周辺山野での生物資源利用(食用)生物リスト

Table 1 List of wild bioresources(for food) around living area of the survey farmer

種別	種名	採取場所	資源利用 項目	現在の 利用状況	採取方法	採取時期												利用方法
						1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
動物資源	ナマズ	近隣河川	食用	△	ヤス突き(*1)、釣り													蒲焼、天ぷら
	ボラ	近隣河川	食用	△	釣り、投網													甘露煮
	コイ	近隣河川	食用	×	釣り、ヤス突き													鯉ほく、あらい(刺身)、甘露煮
	フナ	近隣河川	食用	×	釣り													甘露煮、こぶ巻き
	カジャ	近隣河川	食用	△	ひきり(上ほり)(*2)、釣り、ギョーコン釣り(*3)													焼きびたし
	ドンショウ	近隣河川	食用	△	うし魚(*4)、ぶつこみ魚													柳川(はらみ&ごぼう)
	シマドンショウ	近隣河川	食用	△	うし魚、ぶつこみ魚													柳川(はらみ&ごぼう)
	ウグイ	近隣河川	食用	△	いんじみズで釣る													甘露煮、サンショウ味噌、蒲焼
	ニゴイ	近隣河川	食用	△	サイタタキ魚(*5)													煮こごり
	オイカワ	近隣河川	食用	△	いんじみズで釣る													甘露煮、串焼き
	ケハチ	近隣河川	食用	△	釣り													蒲焼、混ぜご飯
	アユ	近隣河川	食用	○	とも釣り、投網、なほり(魚)(*6)													串焼き、蒲焼、天ぷら、おかわり、そば
	サケ	近隣河川	食用	○	カギ釣り(*7)、投網													つまみ、さつま揚げ、いくら
	イナシ	周辺山野	食用	○	狩猟													燻製
	ウサギ	周辺山野	食用	×	狩猟													燻製
	キジ	周辺山野	食用	×	狩猟													お焼い、物
	ヤマドリ	周辺山野	食用	×	狩猟													お焼い、物
植物資源	ヤマユリ	周辺山野	食用	△	手による採取													天ぷら、きんぴら、梅肉和え
	ワサビ	周辺山野	食用	△	手による採取													-
	フキ	周辺山野	食用	○	手による採取													湯・ふきのとう味噌、油炒り 葉・佃煮
	アオジソ	周辺山野	食用	○	手による採取													漬物、ふりかけ、しょうゆ漬け
	ウト	周辺山野	食用	○	手による採取													天ぷら、おひたし
	ゼンマイ	周辺山野	食用	○	手による採取													油炒り、おにぎり、サラダ
	ワラビ	周辺山野	食用	○	手による採取													サラダ、油炒り、おにぎり
	サンショウ	周辺山野	食用・抗菌	○	手による採取													ふりかけ、魚の煮み止め、さんしょう味噌、佃煮
	モウソウチク	周辺山野	食用	○	手による採取													煮物、ご飯、おひたし漬物、天ぷら
	ヤマゴボウ	周辺山野	食用・薬用	△	手による採取													腹を正調
	コシアブラ	周辺山野	食用	○	手による採取													天ぷら、おひたし
	タラシ	周辺山野	食用	○	手による採取													天ぷら、胡麻和え、おひたし
	ウラボシ	周辺山野	食用	○	手による採取													塩漬、油炒り、おにぎり
	ヤハズ	周辺山野	食用	△	手による採取													生食、甘味料
	カリ	周辺山野	食用	△	手による採取													赤飯、ウラボシの甘煮、くりきんとん
	チヂタケ	周辺山野	食用	○	手による採取													うどん汁、ナメの油炒り
	シメジ	周辺山野	食用	○	手による採取													-
	ハツタケ	周辺山野	食用	△	手による採取													-

○ 比較的頻繁に採取・利用する。

△ 少ない頻度で採取・利用することがある。

× ほとんど採取・利用しなかった。

*1: 3本の鋭利な金具を棒の先端につけたヤスと呼ばれる鋸で、魚介類を突き刺して漁獲する方法。 *2: 夜行性の魚に対応した漁法。夜、灯りで川を照らし、ヤス等で魚を突いて捕まえる漁法。 *3: 浅瀬に立ち込み、竿ごと水中に入れ下流に向かって竿を往復運動させる伝統漁法。 *4: 竹で編んだ細長いカゴをウケと呼ぶ。梅雨時、那珂川をのぼる魚類を川中に仕掛けたウケで捕らえる伝統漁法。 *5: 2艘の舟で刺し網を川底まで張り、下流から投石・棒で水面をたたいて魚を上流の網に追い込む伝統漁法。 *6: 川の中に竹枝で編んだナワバリと呼ばれる障害物を横に固定、川を下るアユはこの障害物を越えられず、その上流部に溜まる。そこに投網をうって捕らえる伝統漁法。 *7: 川をそくするサケを船からカギと呼ばれる鉤状の道具で引っかけて捕る伝統漁法。

境区分別では、樹林内で 156 種（帰化率 3.2%）が、林道・林縁には 291 種（帰化率 6.9%）、棚田の田面および畦畔には計 168 種（帰化率 11.9%）が確認された。一方、馬頭地区の現存植生としては、アカマツ・ヤマツツジ群落、またコナラ群落が代表的な二次林として分布している¹⁰⁾。調査の際にもアカマツ、ヤマツツジ、コナラ等は広範囲に確認され、S 氏宅周辺には典型的な里山林が分布していた。さらに、外来種の出現状況は、棚田が樹林地内や林道・林縁と比べて若干高い値であったが、全体としては低い値（7.7%）であった。以上から本調査地が植物の多様性のある地域であることが考えられた。

3 住宅敷地内の植物の分布・利用状況

調査の結果、143 種が認められた（図 2、表 2）。うち在来種は 51 種（35.7%）であった（表 3）。ヒアリングおよび現地確認から利用状況を整理した結果、鑑賞利用が 55 種（タマアジサイ、アセビ等）、工芸植物種（染料利用）が 2 種（アカネ、キキョウ）、キノコ栽培用の原木利用が 2 種（コナラ、サクラ類）認められた。鑑賞利用植物は、継続的に管理が行われているものである。工芸植物は現在ではあまり利用されていなかったが、原木利用植物は現在でも利用されていた。また、非利用の周辺からの侵入植物が 26 種確認された。これらは主な利用実態はないが、逸出種を除けば、アオキ、シラカシ、シロダモ等の周辺林地より侵入し、粗放管理下（住宅敷地内の除草等）で生育してきた植物と推察される（図 2・表 3）。

食用利用される 58 種（全 143 種の 40.6%）は、ヒアリングおよび周辺の野生植物相を考慮し、次の 4 種群に細分された（表 4）。すなわち、種群 A：周辺にも生育するが敷地内に自生あるいは移植され、食用利用されている種（14 種）、種群 B：古くからある食物利用果樹（4 種）、種群 C：現在食用利用されている栽培野菜（29 種）、

表 2 各環境区分で確認された植物種数

	樹林地	棚田	林道・林縁	合計
出現種数	156	168	291	404
帰化種数	5	20	20	31
帰化率	3.2%	11.9%	6.9%	7.7%

表 3 S 氏住宅敷地内で確認された植物種の利用状況

	食用	鑑賞用	原木	工芸	非利用・周辺侵入種	計
在来種	14	14	2	1	20	51
外来種・園芸種・栽培種	44	41	0	1	2	88
逸出種	0	0	0	0	4	4
合計	58	55	2	2	26	143
在来種率(%)	24.1%	25.5%	100%	50%	76.9%	35.7%

表 4 住宅敷地内で採取し食用利用される植物の内訳

種群 A	種群 B	種群 C	種群 D
野生種	果樹	野菜	近年導入された食用種
ヨモギ ユキノシタ ヤマノイモ ミツバ フキ ハッカ ノビル ドクダミ セリ クリ モウソウチク サンショウ チャノキ タラノキ	イチジク クちなシ シブガキ ジロウガキ	アオジツ（栽培品種） アスパラガス キャベツ キュウリ コマツナ サトイモ ダイコン チンゲンサイ トウガラシ トウモロコシ ナス ナタマメ ニンジン ネギ	ノザワナ ハクサイ ピーマン ハヤトウリ ハルマメ ブロッコリー ホウレンソウ ミズナ モロヘイヤ レタス キク ショウガ ニラ マメギク セロリ
14	4	29	11
58			

種群 D：ハーブ等の近年導入された園芸作物（11 種）である。全体として種群 C の野菜類（食用利用全 58 種の 50%）が多くを占めており、次いで種群 A の野生植物（同 24.1%）が食用植物として多く利用されていた。これには、チャノキ、モウソウチクといった周辺山野外から人為的に住宅敷地内に取り込まれたと推察される種も含まれていた。また、種群 A には、周辺山野での食用生物資源のリスト（表 1）には含まれない植物が 9 種（例えばドクダミ、ユキノシタ等）確認された（表 4）。

一方、住宅敷地内における植物分布は、主に母屋の周辺では鑑賞利用に供されている庭木類、園芸作物のハーブ類が多く分布していた。確認された食用の野生種は、サンショウ、ユキノシタ、クリ等が母屋近くのみで、チャノキは住宅敷地内に散在し、タラノキは母屋北側の自家耕作畑周辺に、モウソウチクは母屋東側竹林に集中して確認される等、種により分布量や配置が異なっていた。

4 食用利用植物と地域植物相との関係

住宅敷地内および周辺山野に生育する種のうち、利用区分毎に種数を集計し図 5 に示した。まず周辺山野で確認された 404 種および住宅敷地内で確認された 143 種（周辺山野外の由来の種も含む）のうち、S 氏宅で何らかの形態で生活に利用される種は合計で 153 種であり、そのうち食用利用は 68 種であった。この 68 種のうち野生植物は 24 種あり、その内訳は、周辺山野より直接的に S 氏宅食卓へ供される種が 10 種、住宅敷地を経由し、すなわち日常的な生活圏に一旦取り込まれてから食卓へ供される種は 14 種と前者を上回った（図 5）。後者 14 種のうち 5 種（クリ、サンショウ、タラノキ、フキ、モウソウチク）は周辺山野にも生育する種であり、住宅敷地を経由せずに食用利用される場合も認められるが（表 1）、残りの 9 種は住宅敷地内のみから採取されていた。

以上より、周辺山野より食用利用として生活に取り込まれる野生植物種は計 24 種であり、周辺山野の植物相 404 種の 5.9%に相当した。周辺山野の植物種が豊富であったため（表 2）、割合自体は低い値になった。後藤ら⁶⁾は近代化が進んでも収入源や生活材として重要度が低下しない生物資源利用として山菜採りを挙げている。本調査地でも食用利用の野生植物の多くは山菜類であり、山菜食が地域の植物多様性と暮らしを結び付けている主要な材料であることが示された（表 1、表 4）。また、食用利用に限れば、住宅敷地内において 14 種が生育していた。このように、住宅敷地が食用利用される地域在来植物と生活圏を繋ぐ中継地として、さらに食用利用の継続性を確保する上で重要な役割を担っていることが示唆された。一般に住宅敷地は住民によって日常的な管理が行われるため、植物の導入・排除の選択性が高まる空間である。一方で、本調査地のように周辺植生が豊かな場合は、種子散布等による周囲からの侵入も多いと考えられる。すなわち、ある程度は侵入を許容し、その一部は食用利用するという、地域の植物多様性との関係を最も直接的・日常的に感じる空間として住宅敷地は位置付くことが示された。

最後に、これらの食用利用 24 種の野生植物について、住宅敷地を含め植生調査の際に種が確認された環境区分毎の生育状況を表 5 に整理した。食用利用植物の生育分布と採取地の関係で特筆すべきは、周辺山野に分布しているのにも関わらず、住宅敷地内の個体のみが採取対象となっている植物の存在である（表 5：I 群）。ここでは植物の種という規準ではなく、住宅敷地の内と外といっ

表 5 環境区分毎の食用野生植物の生育・採取地

Table 5 Growing and gathering environment of dietary wild plant

群名	食用野生植物の 種名	住宅 敷地内	周辺山野		
			樹林地	棚田	林道・林縁
I	ドクダミ	++	+	+	++
	ユキノシタ	+	+		++
	チャノキ	++	+		+
	ノビル	++		++	
	セリ	+		++	+
	ハッカ	+		+	+
	ヤマノイモ	+		+	+
	ヨモギ	+		+	+
	ミツバ	+		+	+
	サンショウ	+	+	+	++
II	クリ	+	+		+
	モウソウチク	++	++		
	フキ	++		++	++
	タラノキ	++			++
III	ゼンマイ		+	+	+
	コシアブラ		++		+
	ウド		+		++
	ワサビ		++		
	アオジソ			+	
	ワラビ			++	+
	ウワハミソウ				+
	ヤマゴボウ				+
	ヤマユリ				+
	合計24種/種数	14	10	12	20
全体割合 (N=24)		58.3%	41.7%	50.0%	83.3%

++ 少数個体または複数個体が疎らに生育、+++ 多数の個体がまとまって生育する箇所を含む、+ 太枠線...主な採取地(ヒアリングによる。)

た住民の空間認識が利用状況に反映されていると考えられた。一方、利用植物の周辺山野での採取地はまとまって生育している箇所および林道・林縁が主に利用されている傾向が認められた。この林縁・林道は、材木の搬出・移動路の確保のため経年的に植生管理(年間 1~2 回の草刈り：ヒアリングによる)が行われてきた空間である。そして、食用植物の多くは樹林地よりも林道・林縁や棚田(田面の耕作と畦畔の草刈り管理による半自然草地の成立)に生育していたことから、これらの環境区分への管理継続が食用利用植物の生育地の確保において重要であることが示唆された。さらに、樹林地でまとまって生育する種も認められ(表 5：II 群-モウソウチク、III 群-ワサビ・コシアブラ)、また食用利用の確認されたキノコ類も主に樹林地内において生育・採取される種群である(表 1)。このように食用利用の多様性の維持には、地域内に多様な環境区分が在る事も重要となる。

VI おわりに

本研究では、周辺植物相の多様性と農村住民の食用利用植物との重なり程度について調査・分析を行った。これは生物多様性と人間生活の豊かさの関係をみる一つの試みといえる。ただし本論は、一事例地での報告であるため、

図 5 S 氏宅が利用する野生植物資源等の利用状況と区分別の種数

Table 5 Wild(non-wild)plant resources of usage situation and each usage type of species

同地区の他宅や他地域との比較検討による普遍化・体系化が今後求められる。また、農家の住宅敷地は周辺植物相の多様性を生活圏に取り入れる上で、食用利用野生植物の経由地として重要な機能を持つ空間である事が示唆された。さらに、動物やキノコ類も含め、年間を通じた適期の野生生物の食用利用も認められた。それらがもたらす生活への充足感、季節感、伝統的行事との関連等、より細かな地域生物相と生活との結びつきに注目することで、単に種数の多寡のみならず、地域生物相の多様性と住民の内面的な豊かさ¹¹⁾との関わりも今後、検討していく必要がある。

地域植物相と食用利用の関係創出における計画論としては、周囲の植物相が豊富な地域での、①その食用利用が良く行われるケース、②食用の資源利用が衰退・消失しつつあるケース、また、③周囲での植物相の多様性が低下したために食用利用が寡少なケースに応じて、異なる対策が必要である。本調査事例は、次世代の生物資源利用は必ずしも多くはない(ヒアリングから)ことから①と②のケースの移行期に該当すると判断され、山菜食の等の食文化の継承および生育地の保全管理の継承が課題である。すなわち①では、利用伝統(表1)の継承のみならず、地域の潜在的な植物相を考慮した適正な管理(表5)の両立が求められ、その際には、家庭内の世代間のみならず地域コミュニティ単位での継承も重要となる。また②へと移行が進んだ場合は、地域の伝統的な食用植物資源利用の掘り起こしと再評価が求められる。そして、これらにおいて住民が最も日常的に接する空間(住宅敷地あるいはコミュニティー施設敷地など)は、農村の生物多様性(農村社会と不可分のもの)の保全における効果的な計画要素となると考えられる。

謝辞

本研究の一部は、三井住友銀行の寄付による慶應義塾大学國領研究室と株式会社アネックスの共同研究として実施された。また、科学研究費補助金(基盤研究C #19580286, 研究代表者:大澤啓志)の研究成果の一環である。

注釈

注1) 明治以降に帰化した狭義的な帰化種、耕作・栽培種、近年導入された園芸種を除く在来植物とする。

注2) 気象庁(2008) <<http://www.jma.go.jp/jma/index.html>>より気象観測データ2008~1998年より算出した。

注3) 2005年農林業センサス第1巻 栃木県統計書より算出した。

注4) 栃木県那珂川町役場ホームページ(2008)

<<http://www.town.tochigi-nakagawa.lg.jp/index.html>>

2010年5月13日更新 2010年5月10日閲覧

注5) 社団法人 大日本山林会主催の農林経営コンクール(2009)においてS氏は優秀な成績を得ている。

引用文献

- 1) 大澤啓志・大久保悟・楠本良延・嶺田拓也(2008):これからの農村計画における新しい「生物多様性保全」の捉え方,農村計画学会誌 27(1), 14-19.
- 2) 古賀陽子・小林達明(2002):房総半島に自生するミツバツツジ類の山採りと民家移出の実態について,ランドスケープ研究 65, 569-574.
- 3) 道下雄大・梅本信也・山口裕文(2009):西南日本の民家庭園に生育するRDB掲載植物の現状,保全生態学研究 14,81-89.
- 4) 藤井英二郎・細田和寿(1984):農村空間の構造と特性に関する研究—茨城県における地域特性—,造園雑誌 47(3), 137-153.
- 5) 堀内美緒・深町加津柄・奥敬一・森本幸裕(2006):明治後期の日記にみる滋賀県西部の里山ランドスケープにおける山林資源利用のパターン,ランドスケープ研究 69(5), 705-710.
- 6) 後藤寛寛・小笠原輝・本郷哲郎・池口仁・武内和彦(2003):山梨県郡内地域における土地利用と生物資源利用の変遷,ランドスケープ研究 66(5), 569-572.
- 7) 斎藤功・山本充(1992):栃木県栗山村土呂集落における生業の変遷と資源利用の空間的变化:ブナ帯山村の一事例,筑波大学人文地理学研究 16, 129-147.
- 8) 阪本寧男(1998):日本海をめぐる民族自然誌研究,環境科学総合研究所年報 17, 79-95.
- 9) (財)21世紀村づくり塾(2000):伝統食を活かしたむらづくりセミナー報告書 p.1
- 10) 環境庁(1986):『第3回自然環境保全基礎調査(植生調査)栃木県現存植生図(喜連川)』,環境省,東京.
- 11) 松井健(1998)マイナー・サブシステンスの世界,『民族の技術(篠原徹編)』,朝倉書店,東京, 247-268.

Summary

To examine the relationship between dietary wild plants and variety of local flora in a rural landscape, we investigated one farming family in Batou district, Tochigi prefecture. As a result, 15 taxa of floristic species were used for food, 143 taxa of dietary plants were observed in the backyard of their farmhouse, and 404 species of wild plants was recorded around the farmhouse. The dietary wild plants was 24 species (6.0%) in 404 species of wild plants. The dietary wild plants was not many in the regional flora.

1) rural landscape 2) dietary wild plant 3) regional biological resources 4) biodiversity

(2010年5月14日 受付)

(2010年10月3日 受理)